柔道国際講習会の実施に関する研究

―― デンマークにおける柔道国際サマースクールの事例から ――

橋本敏明*1・佐藤宣践*1

A Study on the Operation of International Judo Seminar

―― A Case from the International Judo Summer School in Denmark ――

by

Toshiaki HASHIMOTO and Nobuyuki SATO

Abstract

The goal of this study is to clear the issues and the established requirement from the International Judo seminar which operate actively worldwide.

We analyzed the 11 cases from International Judo Summer School, which was conducted for 14 years, between 1993 and 2006 in Denmark.

We conducted questionnaires on the participants to the International Judo Summer School and analyzed on their reports as well.

We were able to show the following issues from the results clearly.

1. Administrative operation, e.g. participation fee, the venue, accommodation and food, are highly satisfied. This is the necessity condition to the future operation.
2. The content of seminar was also highly satisfied. And 85.0% of the participants think that this seminar experience will give them positive attitude for their future life, and this is rather favorable disposition. Especially, Japanese participants have become increasingly aware of International exchange program through the School.
3. Regarding establishment requirement of International Judo Seminar, we showed here 10 positive requirements, such as, a clear goal for the operation, and well organized seminar contents, so on.
   However, depends on the various circumstances, the 10 positive requirements might become negative issues.

The project evaluation, the established requirement and the future issues are clearly

＊1　東海大学体育学部武道学科

showed in this study and they will be the guideline for our future similar projects.

Ⅰ　はじめに

我が国で目下推進されている教育改革の眼目の一つは，国際社会に生きる人材の育成であろう。そのことは，いわゆる改正教育基本法（平成18年法律第120号）第二条（教育の目標）の五に「伝統と文化を尊重し，それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに，他国を尊重し，国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」[1]が明記されたことからも明らかといえる。平成15年３月の中央教育審議会答申では，21世紀の教育が目指す目標が五つ示され，その一つに「日本の伝統・文化を基盤として国際社会を生きる教養ある日本人の育成」[2]が掲げられている。これらから分かるように，いわゆる伝統性と国際性は相反する要素ではなく深く関連し結びついている。この教育目標を実現させるために何を為すべきか。教育実践面から具体的な取組みが問われているといえよう。

われわれは，1970年代半ばから大学において柔道を通じた国際活動を推進してきた[3]。そのねらいは，まさしく柔道によって国際社会に生きる人材を育成することにある。周知のとおり柔道は，日本の伝統文化である武道[4]として，またオリンピック競技種目の国際的スポーツとして広く知られている。ゆえに，「伝統とは何か」，「文化の変容」，「異文化理解」，「共生」などを学ぶに適した分野といえるだろう。われわれの国際活動は，当初大学柔道部の競技力向上を主たる目的にしていたが，やがて諸外国の若者らとの相互理解と友好親善を図ることを重視するようになった。本研究で対象とする柔道国際講習会もデンマークにおける教育実践の一つである。

本研究に関わる報告については，これまでに体育学部紀要（1998）と日本武道学会大会（1997，2008）で発表した[5]。そこで今回，事業終了によって全体を概観することが可能になったので，先行研究を踏まえ，参加者の意識から事業評価を浮き彫りにするとともに柔道国際講習会の成立要件と課題について考察した。その結果，今後の事業計画策定と推進，及び国際社会に生きる人材の育成に参考となる知見が得られたので報告するものである。

Ⅱ　デンマークにおける柔道国際講習会について

1993年から2006年までの14年間に計11回開催された柔道国際サマースクール（柔道国際講習会）の概要を以下に記す（表１）。

１．事業概要

１）講習会名称：柔道国際サマースクール（International Judo Summer School）

２）運営組織　：主催は学校法人東海大学，主管を学園の学務部門及びスポーツ教育部門が司る。現地ではデンマーク柔道連盟（DANSK　JUDO　UNION，以下DJUと称す）が協力し，日本からの指導者派遣と学生参加の面で東海大学及び国際武道大学の柔道部が協力した。

３）会　場　　：東海大学付属デンマーク校（中・高等部，全寮制）。同校が設置されたプレスト市は，コペンハーゲン市内から車で高速道路を使用して約70分。体育施設は，体育館，武道館，プール，総合グランドなどがある。宿泊は生徒寮を，食事は学校の食堂を利用した。

表１　柔道国際講習会（International Judo Summer School）の実施と参加者について

回	実施期間	日本人の参加		参加者数(人)		
		講師(人)	参加団体	DJU	JPN	合計
1	1993/8/19～22(4日間)	3	武大 東海大	46	27	73
2	1994/8/18～21(4日間)	3	武大 東海大	54	21	75
3	1995/8/17～20(4日間)	4	武大 東海大	43	24	67
4	1996/7/27～8/2(7日間)	2	東海大他	58	12	70
5	1997/8/16～19(4日間)	2	武大 東海大	30	14	44
6	1998/8/16～19(4日間)	3	武大 東海大	49	27	76
7	1999/8/18～21(4日間)	1	東海大	25	3	28
8	2002/8/16～19(4日間)	4	参加なし	56	6	62
9	2003/8/22～24(3日間)	5	東海大付属高生	70	20	90
10	2004/8/12～15(4日間)	2	参加なし	89	2	91
11	2006/8/17～20(4日間)	2	東京大	50	11	61
延べ人数(合計)		31	5団体ほか	570 (77.3%)	167 (22.7%)	737 (100%)

(注)　・参加者数は把握できた人数(推定)。
・DJUは、デンマーク柔道連盟の、JPNは日本の英文略称。
・2000年、2001年、2005年は実施せず。

4）参加者　　：DJUが募る者，及び日本からの参加者（主として学生）。
5）運営経費　：主催者の予算，及び参加費（DJUは500Dkr，日本円換算で約10,000円，日本からの参加者は25,000円）
6）その他　　：夏季に開催。参加者には修了証を授与。

2．実施に至る経緯と開催目的について

東海大学と米国タフツ大学が共同開催した1987年8月の「アジア・環太平洋学長研究所長会議」（18カ国・地域の56大学・研究所が参加）において大学間のスポーツ交流について，「大学間のスポーツ交流は，国境を越えた友好親善，新しい世代の精神的連帯に大きく寄与するものである。」と合意された。そして，翌年の1988年2月，学校法人東海大学は，DJUの協力を得て「松前コペンハーゲンカップ国際柔道大会」をコペンハーゲンで開催した。この国際大会は，現在も隔年開催で続いている。また，1992年9月にコペンハーゲン郊外の東海大学ヨーロッパ学術センターで「第1回武道フォーラム」を開催した。フォーラム期間中に夏の柔道行事についてDJUと打ち合わせを行い，1993年8月に柔道国際サマースクールが開かれることになった。

開催の目的は，次のとおりである。

1）日本の伝統的スポーツで広く世界のスポーツとして愛好されている柔道の真髄を紹介する。
2）大学の専門知識，教授法，研究成果を紹介し，教育研究面から柔道普及を推進するとともに教育研究の充実を図る。
3）若者の国際理解と友好親善を深め，スポーツによる国際交流を推進する。
4）東海大学付属デンマーク校で実施することによって創立者・松前重義先生の教育理念を理解する。

これらの目的は，創立者・松前重義が国際柔道連盟会長在任中（1979年12月～1987年11月）に展開した諸活動に関わる内容でもあり，われわれにとっては，創立者の思想と行動を継承する意味を持つものであった。

Ⅲ　方法

参加者へのアンケート調査を実施した。また，行事報告書などを参考にした。柔道国際講習会の成立要件については，実施状況の推移を資料によって考察した。

1．アンケート調査について

合計11回開催した中で，本研究では第9回～第11回の参加者へのアンケート調査の結果を分析し，先行研究と比較検討する。

調査は，主に次の3点について，参加者の感想，意識を把握することを目的とした。

1）参加費，施設，食事など運営に関すること。
2）講習会の内容に関すること。
3）柔道を通じた国際交流の効果に関すること。

2．調査の方法

参加者に対して講習会終了時に質問紙（英語，日本語）を配布して回答を依頼し，その場で回収することを原則とした。集計は単純集計及びクロス集計を行った。

3．調査内容

調査項目は，性別，年齢，国籍，段級位，立場などの回答者の特色を示す基礎的項目，及び前述の調査目的（3点）に関する項目など計18項目から成る。

Ⅳ　結果と考察

1．調査対象の特色について

第9回～第11回の参加者数は，延べ242人で，アンケート回答者数（有効標本数）は，113（回収率46.7%）である。比率は，DJUが86.7%，日本側（以下JPNと称す）が13.3%である。男女比は，男性が74.8%で4分の3を占めている。日本人女性は僅か1人のみ。

年齢層については，「15～19歳」が最も多く（38.1%），次に「20～24歳」（15.9%）であり，これらで54%を占める。段級位は，「初段」の割合が高く（31.9%），「2級」（25.7%），「1級」（17.7%）と続く。日本人は全員が有段者（初段

QUESTIONNAIR

The 11th International Judo Summer School (Tokai Judo Camp)

The purpose of this survey is to gather frank opinions from the participants in the 11th International Judo Summer School to help plan and perform the project of this kind in the future. As you might aware that this summer camp started 1993, and it will be the last one this year. We are highly appreciated for your kind , consecutive support and your generous cooperation for over 11 years.

By Physical Education Division Academic Affairs Department Tokai University

Please enter your answer in ( )with appropriate number. If your answer is "other"

Gives a brief statement parentheses. Date of filling out: August _____,2006

▼ What is your course ? ① Fighters ②Coaches ( )

(1)Sex 1. Male 2. Female ( ) (2)Age (as of the date filling out) ( )

(3)Nationality 1.Danish 2.Japanese 3.Other ( ) ( )

(4)Judo grade/class you hold ( )Dan(grade) / ( )Kyu(Class)

(5)Your most principal in Judo circle

1.Officer at Foundation / Association 2.Coach 3. Player 4.Reserecher ( )

5.Judo enthusiast (as a hobby) 6.Other ( )

(6)How many times have you participated in this Summer School? ( )

1. 1st time 2. 2nd 3. 3rd 4. 4th 5. 5th 6. 6th 7. 7th 8. 8th 9. More than 8 times

(7)Your impression as whole 1.Good 2. Average 3. Bad 4. Uncertain ( )

(8)Duration (・Fighters course ⇒3days ・Coaches course⇒ 2days)

1.Good 2.Average 3. Bad 4. Uncertain ( )

(9)Program 1.Good 2.Average 3. Bad 4.Uncertain ( )

(10)What item(s) of the program interested you most ? (Select two or less)

1. Randori "Tachiwaza" 2. Randori (newaza) 3. Judo technique 4. Lecture

5. Sports(swimming, etc) 6. Other ( ) ( ) ( )

(11)Fee 1. Expensive 2. Average 3. Inexpensive 4. Uncertain ( )

(12)Area (Dojo and the other facilities)

1. Good 2. Average 3. Bad 4. Uncertain ( )

(13)Dormitory 1.Good 2. Average 3. Bad 4. Uncertain ( )

(14)Meals 1.Good 2. Average 3. Bad 4. Uncertain ( )

(15)Did you think this Summer School was helpful for your future development?

1. Yes 2. No 3. Uncertain ( )

(16)Those who answer "Yes" to Question (15) → In what aspect did you think it was especially helpful ? (Select two or less)

1. Advancement of competitive-mindedness 2. Advancement of leadership 3. Theoretical studies

4. More understanding of Judo as a whole 5. Increased friendship with participants

6. Importance of international exchange though Judo 7. Other ( ) ( ) ( ) ( )

(17)Please give any comment on the International Judo summer School.

▼ Since this is our first time to hold a course for coaches, I would like to have your comment if you took coaches course.

Thank you for your cooperation.

46.7%，二段53.3%）である。参加者の立場については，63.7%が「競技者」と答えており，次に「コーチ」の24.8%である。

なお第１回～第５回を調査した先行研究（以下，「1998報告」と称す）の傾向は，以下のとおりである。

参加者数は，延べ329人（男性277人，女性52人)。アンケート回答者数（有効標本数）は206（回収率62.6%）で，比率がDJU 66.0%に対しJPN 34.0%。男女比は，男性 80.6%に対して女性 19.4%で，平均年齢が22.7歳（SD6.2）である。段級位に関しては，二段の割合が30.1%と最も高く，次に初段の20.9%である。立場は，「競技者」77.6%，「愛好者」9.2%，「コーチ」7.8%の順である。

全11回を通して，参加者は10代の少年少女から50代の成年まで幅広い。日本人は，学生を中心に参加者を募っているので年齢幅は小さい。第９回～第11回で最も人数が多い年齢層は「15～24歳」であった。この傾向は，開催目的の一つが若者の交流にあるので好ましいといえる。段級位は「初段～２級」といった初心者レベルの割合が高い。DJUに４段，５段がそれぞれ３人参加している。実技レベルは「1998報告」の方が高い。

参加者の立場に関して「1998報告」では「競技者」が77.6%であったのに対して63.7%と下がっている。逆に「コーチ」は7.8%から24.8%へと上がっている。この傾向は，第９回から指導者を対象とするコースを設定した影響と考えられる。これは，DJU側の14年間の推移と変容の表れであろう。またDJUの参加者のうち，約半分の46.9%が複数回数の参加者で，「５回以上参加」と答えた者が14.3%を占めている。

２．管理運営に関すること

１）全般的な印象について

全般的な印象を聞いたところ，「良い」が79.6%で最も多く，「普通」が15.0%，「悪い」は0.9%，「無回答」4.4%である。JPNは，「良い」80%，「普通」20%である。「1998報告」同様に，全般的に満足度が高いことが窺える。

２）参加費について

参加費について聞いたところ，「普通」が48.7%で最も多く，「安い」が18.6%，「高い」は15.0%，「わからない」9.7%，「無回答」8.0%である。「普通」と「安い」を合わせると67.3%になる。「1998報告」では69.9%である。参加費としては妥当な金額であったといえよう。なおJPNを見ると，「1998報告」では「高い」21.4%，「わからない」28.6%であり，今回も「わからない」が40.0%を占めていた。

３）会場施設について

会場施設について聞いたところ，「良い」が84.9%で最も多く，次に「普通」の11.5%，「悪い」と「無回答」が各1.8%である。「良い」と「普通」を合わせると96.4%になる。「1998報告」では97.1%である。会場施設に関する満足度は非常に高いといえる。

４）宿泊施設について

宿泊施設について聞いたところ，「良い」が61.1%で最も多く，次に「普通」の29.2%，「悪い」3.5%，「わからない」1.8%，「無回答」4.4%である。「良い」と「普通」を合わせると90.3%になる。「1998報告」では97.1%である。宿泊施設に関する満足度も非常に高いといえる。

５）食事について

食事について聞いたところ，「良い」が83.2%で最も多く，次に「普通」の10.6%，「悪い」1.8%，「わからない」0.9%，「無回答」3.5%である。「良い」と「普通」を合わせると93.6%になる。「1998報告」では94.6%である。食事に関する満足度も非常に高いことが分かる。

以上のことから管理運営に関しては，全11回を通して参加者の満足度が高いといってよいだろう。このことは，国際的な行事を継続して実施するために必要な要件ではないだろうか。

３．講習内容に関すること

１）期間について

期間については，第４回（1996年）と第９回

(2003年) を除いて８月中旬から下旬にかけての４日間を原則として開催した。デンマークと日本では，学校の夏休み期間が異なるために生徒・学生，及び会場の都合を調整する必要があった。この点は，準備段階で常に問題とされ，結局，土，日を含む４日間で実施することになった。

その期間について聞いたところ，「良い」が79.7％で最も多く，次に「普通」の15.9％である。「悪い」と「わからない」は皆無で「無回答」4.4％である。「良い」と「普通」を合わせると95.6％に達する。「1998報告」では「普通」の割合が最も多くて72.4％であり，期間については，おおむね理解を得ていたことが窺える。

２）内容について

講習内容について聞いたところ，「良い」が69.0％で最も多く，次に「普通」の24.8％，「悪い」0.9％，「無回答」5.3％である。「良い」と「普通」を合わせると93.8％になる。「1998報告」では93.7％であり，双方ともに満足度の高さが窺える。

３）良いと思った内容について

良いと思った内容について，６項目の中から２つ以内で選んでもらったところ（複数回答)，「技術講習」が64.6％で最も多く，続いて「乱取・立技」(62.8％)，「乱取・寝技」(22.1％)，「講義」(17.7％）の順である。「1998報告」と比べると，上位２項目の割合が圧倒的に高い傾向は変わらないが，「水泳等のスポーツ」が24.9％から4.4％へと減り，「講義」が4.6％から17.7％へと増えている。前者は JPN で挙げた者が多かったのだが，それが大きく減っている。後者については，指導者を対象とする内容を加えたので，その反映と思われる。この傾向からは，男女ともに技の習得に強い関心があることが垣間見られる。

実際の練習では，「技術講習」「乱取（立技・寝技)」において日本柔道の技と練習法，及びデンマークの柔道スタイルと練習法を相互に示しながら行った。また，柔道やスポーツに関する講義も行い，日本文化の紹介に努めた[6]。さらに夜には参加者が懇談できる場と時間を設けた。デンマークではこのような時間を大切にする。

４）参加経験が今後の成長に役立つと思うかどうかについて

参加経験は今後のあなたの成長に役立つと思いますかと聞いたところ，「思う」が85.0％に対して「思わない」は僅かに0.9％である。「わからない」は11.5％，「無回答」2.6％である。JPN は全員が「思う」と回答している。「1998報告」と比べると，「思う」の割合が少し落ちているが，全体的傾向は変わらない。この行事が参加者に良い刺激を与えていると見てよいだろう。

５）成長に役立つ内容について

成長に役立つと思うと回答した者（n＝93）に，その内容について，７項目の中から２つ以内で選んでもらったところ（複数回答)，「柔道全般の理解」が49.5％で最も多く，続いて「競技力向上」(44.1％)，「国際交流の大切さ」(29.0％)，「参加者との交流」(22.6％)，「理論」(18.3％)，「指導力向上」(16.1％)，「その他」(4.3％）の順である。「1998報告」と比べると，「柔道全般の理解」「競技力向上」「理論」などの割合が増え，「国際交流の大切さ」「参加者との交流」が減っている。この傾向から，相互交流を意識した段階（前半）から競技力向上，指導力向上を含む柔道全般への理解を求める段階（後半）へと変化していることが見て取れる。DJU と JPN を比べると，「柔道全般の理解」が51.3％で１位の DJU に対して JPN は「国際交流の大切さ」が60.0％で１位である。因みに「1998報告」では71.6％の高い割合を示している。このことから JPN の方が国際交流を強く意識していることが窺える。

４．参加者の感想について

調査項目には感想を自由に記述する欄を設けている。113の内，49の回答があり，38が判読できた（33.6％)。DJU が大半だが，内容的に否定的意見は皆無で，貴重な経験をしたことや良い印象，及び要望が述べられていた。以下，感想を列記する。

〈良い経験・印象について〉

・貴重な，素晴らしい，興味深い経験だった。
・たくさんのことを学び，とてもよかった。よいキャンプだった。
・技術の向上と新たな指導方法を得る良い機会になります。
・素晴らしい計画です。素晴らしい施設と食事だった。すべてが最高だった。
・開催地が大変良かった。野外活動に適した素晴らしい田園にありました。
・講義と練習などプログラムは少しハードだったが良かった。
・私は，日本の指導者の教養の深さと品格を非常に感じた。
・国際的指導者から学び，インスピレーションを得る，このようなコースに参加することは，デンマークのコーチにとって重要と思います。技術の向上と新たな指導方法を得るよい機会になります。

〈要望について〉

・もっと日本の選手，柔道家に参加してほしい。他の国々にも参加してほしい。
・東海サマーキャンプを続けてほしい。

5．柔道国際講習会の成立要件について

14年間の推移を見ると，2000年，2001年，2005年は実施していない。これは，海外において行事を継続的に実施することの難しさを示しているといえよう。一回きりの行事は，ある程度の無理があっても実施することができるが，毎年の継続開催となると社会変化や参加者の意識変化などの影響もあり，その時その時に課題が生じ，状況に対応して課題を克服する努力が要求される。講習会や合宿などの行事は，各国，各地域において様々な方法で実施されているが，日本の大学が組織的教育活動として継続的に海外で開いた例は他に見当たらない。その点，本事例は柔道国際講習会の成立要件を考える上で，また同様の行事を計画する上で，貴重な示唆を与えるといえよう。それらの要件を10項目にまとめた。カッコ内には要点を簡潔に記した。

1）明確な実施目的（→継続的な開催を可能にする）
2）適切な実施時期と期間（→日本の学校との夏休み期間の違いを考慮する）
3）参加者のニーズに合う指導者（→日本柔道の技と心を紹介できる技量を持つ指導者）
4）良い講習内容（→目的，ニーズに沿う内容）
5）使用言語（→英会話能力が必要，とくに日本人参加者）
6）良い環境（→会場，宿泊所，食事，交通など）
7）経済的な配慮（→とくに航空運賃を自己負担する日本人参加者の負担に配慮）
8）良い企画，運営スタッフ（→優れた事務能力，交渉能力が必要不可欠）
9）主催者と関係団体の信頼と協力（→ DJU との信頼関係）
10）安全対策など（→怪我，病気，事故などに対する危機管理）

これらの要件は，状況に応じて実施を困難にする課題になることを指摘しておきたい。

Ⅴ　まとめ

デンマークにおける柔道国際サマースクールは，1993年から2006年までの14年間に計11回開催された。われわれは，この事業（柔道国際講習会）を国際社会に生きる人材育成のための教育実践と捉え，参加者に対するアンケート調査や報告書などの資料検討によって事業の評価，及び事業の成立要件と課題を浮き彫りにすることを試みた。その結果，次のことを浮き彫りにすることができた。

1．参加者は，20歳前後の若者の競技者が多く，開催目的の一つである「若者の国際理解と友好親善を深め，スポーツによる国際交流を推進する」の趣旨に沿っている。
2．柔道国際サマースクールに関する全般的な印象は良く（79.6%），満足度が高いことが窺えた。管理運営面（参加費，会場施設，宿泊施設，食事）に対する満足度が高いことは，事業の継続に必要な要件と考えられる。
3．講習内容についても，「良い」と「普通」を合わせると93.8%に達し，満足度が高いことが窺えた。男女ともに技の習得に高い

関心を示している。また，参加経験が今後の成長に役立つと思うと答えた者の割合が85.0％を占めており，大変好ましい傾向といえる。とくに日本人参加者は柔道を通して国際交流を図ることを強く意識していることが窺える。

4．柔道国際講習会の成立要件に関して，「明確な実施目的」や「良い講習内容」など10項目を挙げ，それぞれ要点を示した。これらの要件は，状況に応じて課題になるといってよい。

本研究で対象とした柔道国際サマースクールの事業は終了したが，浮き彫りにすることができた事業評価，成立要件，課題などは，今後同様の事業を計画する際に一つの指針になるのではないだろうか。

なお，本研究に関わる今後の課題としては，柔道を通じて国際社会に生きる人材を育成するという観点から柔道国際サマースクール参加者に対して参加経験がその後の柔道人生等にどのような影響を与えたのか，追跡調査を行う必要があるだろう。

注・文献

1）文部科学省（2007）教育基本法関係資料集，文部科学時報第1574号，ぎょうせい，pp8.

2）同上書，pp84-85.

3）東海大学柔道部は，1974年9月～10月，デンマークに設置されたヨーロッパ学術センターの文化週間に参加することを主たる目的にヨーロッパ6ヶ国で親善試合と練習を行った．これを嚆矢として2008年2月までの期間に合計30回の海外研修を行っている．研修内容が大きく変わったのが2002年2月のカナダ研修からで，柔道部の立場よりも武道学科の観点から「柔道海外実習」を視野に入れて実施するようになり，2007年2月の海外研修では実習科目に位置づけられた．

4）1987年4月に日本武道協議会が制定した『武道憲章』は，武道の概念を次のように示している（下線は筆者）．

「武道は，日本古来の尚武の精神に由来し，長い歴史と社会の変遷を経て，術から道に発展した伝統文化である．」

5）先行研究は，以下のとおりである．

⑴橋本敏明，光本健次，恩田哲也，若山英央，越野忠則（1997）柔道国際講習会の教育効果について―デンマークにおけるサマースクールの分析―，武道学研究第30巻別冊・日本武道学会第30回研究大会発表抄録，pp76.

⑵橋本敏明，中西英敏，光本健次，恩田哲也（1998）柔道国際講習会の実施状況についての調査報告―デンマークにおけるサマースクール参加者を対象として―，東海大学紀要体育学部第28号.

⑶紫牟田武徳，福岡政章，橋本敏明，佐藤宣践（2008）柔道国際講習会の教育的効果に関する一考察，武道学研究第41巻別冊・日本武道学会第41回研究大会発表抄録，pp63.

6）講座は，第1回から第6回まで，第8回，第9回，第11回の計9回実施された．第5回まではデンマーク人講師が，第6回以降は日本人講師がスポーツ，体育，柔道などをテーマに講演した．2002年の第8回のときは，「文化交流の集い」を開き，3名の東海大学付属高校の教員が書道，武士道，日本の伝統行事のテーマで日本文化を紹介した．